

本願力にあいぬれば むなしくすぐるひとぞなき
功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし

今日も『和讃のこころ』サブテーマを「本願」として、大切な真宗のお言葉とところに出遇っていたら、と思います。ご住職のお話を久しぶりに隣でしっかり聞かせて頂きました。本当に大切なお念仏が我々の大切な方から伝えられ、そして、また次の世代に伝えられていく。そういった意味で言うならば、ご住職の親様があって、信雄さんがあって、そして健心くんがあって、非常にこのお寺も言うことがないんじゃないかと思うわけです。有難いことだと思うんですね。大切に育ててあげて頂けたらと願っております。

私たちは宗門の中で大切な心を育てて頂いております。育てて頂いている中で、今回ご本山で御影堂落成慶讃の大法会が御座いました。私が居ります浄泉寺でも15日の日に33名でお邪魔させて頂きました。久遠寺様は16日の五木寛之さんの時に行かれたそうですね。本当は、浄泉寺でも16日の五木寛之氏の講演のところに行きたかったんです。早速本山に連絡してもらいましたが、満席になってしまいました。ということは行けなかったんです。久遠寺さんはご本山から案内があったと同時に連絡して、とにかく押さえられたらしいですね。

結局、浄泉寺は15日のお昼の15時から法要にお邪魔させて頂いたのですが、非常に「良かったな」と思うことがあったんです。講演・イベント的なものは五木寛之さん、養老猛さん、雅楽の東儀さんらはビックネームであります。私たちが伺いました時は横笛の藤舎という方で、NHKの大河ドラマなどでよく吹かれているそうです。なかなかこれも尊かった。お説教も素晴らしいご法話、有難いご法話をさせて頂いて、「非常によかったな」と思って檀家団体一緒にバスで帰ってきました。

すると、お同行の方々がバスの中でやたら「よかった、よかった。よかった、よかった」と言われるんです。確かに横笛もご法話も良かったのですが、その「よかった、よかった。」が何か極端に、非常に強い口調で言われるので、思わず聞いたんです。「よかった、よかったと言われますが、何がそんなに良かったのですか？」と。私自身、お勤めそのものは衣を着て内陣に出仕しておりましたので、檀参席におりませんでした。そういうわけでみなさんがそんなに喜ばれる理由がわかりませんでした。それで、何が良かったかと問われたならば、「あんなに大きな声で『文類偈』をご本山の本堂、それも真正面の真ん前で一緒に大きな声で御唱和させて頂いたのは生まれて初めてだ」と言われたんですね。当然ながら浄泉寺のお檀家さまはご本山報恩講にしょっちゅうお参りしてみえますが、いつも15日お日中法要、ご法主さまの「ご親教」の日に伺いますので「文類偈」はご唱和していないんです。そんな中で、初めて「文類偈」のご法要に遇えた、それも人数が少なければ遠慮してしまうのですが、その日は満堂であります。満堂ですので全てのお同行が大きな声を出されるのに、みなさんひっぱられたんですね。ですから、私も内陣であんなに大きな声でお勤めさせて頂いたのは生まれて初めてです。そのことを「よかった、よかった。よかった、よかった」と喜んでおられたんですね。ある方はですね、「お勤めさせてもらいながらご開山聖人のお姿に手を合わせておりますとなんだか涙が出てきました」と言われるくらい。また違う方は、そんなにご本山に行かれた方ではありませんが、その時の印象として何か文類偈をあのお影堂であげさせて頂いていますと「なにか懐かしい場所にきたような気がする」という言い方をされてい

ました。まさにその言葉を聞いた時に、「私たちのこのころの故郷であり、そしてご本堂は極楽浄土を形として表して下さっている場所でありますから、私たちがそういった浄土の国に生まれたい、と思えるような気持ちを育てて下さっているのかな」と今更ながらに感じさせて頂きました。本当に素晴らしい法要であったと思います。

そういったご本山の法要から帰ってきて「非常によかった」と思っておったのですが、考え直すこともありました。ご本山は私たちを育てて下さっておるのですが、本当に育てられてあるのでしょうか。私が居りますお寺は、11月の連休に報恩講を勤めております。そして、11/23はこども報恩講として昼間は小学生・保育園の子供さんに集まってもらって「文類偈」をご唱和して頂く習いとなっているんです。ですから「文類偈」をご唱和して頂くには練習が必要なわけで、前もって2日間夜7時から練習会を行うんですね。10年以上前のことです。その練習会の終りに、私が子供たちに向って最後に「合掌してください！」といったらみんな合掌しないんです。「なぜだろう？」と思い、もう一度「合掌してください！」といいますと子供たちはキョロキョロ横を見ている。そこで私の息子が手を合わせたもんですから、それに合わせて他の子供たちも手をあわせたのです。そこで、私は思ったんです。「ひょっとしたらこの子供たち、合掌の言葉の意味がわからないのではないかと。そして聞きました。「ひょっとしたらみなさん、合掌という言葉がわかっていないですか？」と聞きましたら、ズバリそうだったんです。びっくりしましたね。そこで「合掌というのは、手を合わせてありがとうございますとか、心をこめて手を合わせて頂くこと、だから合掌というのは大切なんですよ」と申し上げて説明させて頂きました。合掌は、教える聞く基本だと思います。根本とっていい。この根本である合掌がわからないとなると、礼拝のこと、念仏のこと、あるいは仏教や真宗のこともわからないと思うんです。例えば、私たちは日本語をしゃべります。日本語をしゃべるということは相手も日本語をしゃべる。言いたいことを理解し合えるんですね。ですが、相手が日本語がわからないと一生懸命日本語を話してもまったく通じませんね。実は、そういう状況になっていないか。つまり、仏教の基本的な言葉がわかっていないと、こちらが一生懸命仏教のことを伝えようとしても理解できないのです。ですからそのような状況になってしまいますと、育てられる育てられないといったレベルの話にならないのではと思うのです。子供たちが合掌がわからなくなれば、「ひょっとして親たちもわかっていないのでは？」と衝撃を受けたのを思い出します。合掌がわからないということは、宗教そのものがわからない。では宗教とは一体何なのでしょう。前にも言いましたが、宗教とは、「宗」は物事の成り立っている根本原理、「教」は言葉で表したもので、ですから宗教は物事の成り立っている根本原理を言葉で表したものです。もっとはっきりいえば、私たちのいのちの意味、生きる意味を伝えて下さるのが宗教であります。そういった意味でいろんな宗教があるのです。ただ一般的に宗教と言いますと、神様仏様に手を合わせて自分の願いがかなうように祈りをささげているのが宗教と思っている方が割とあるように思えます。しかし、浄土真宗はそういう宗教とはまったく違います。多々ある宗教の中でも非常に特徴的といいますか、世界中に例を見ない形になっているんです。つまり、祈りのない宗教＝浄土真宗だと思うんです。真宗では、仏様にむかって祈るということはないのです。

ここで葬儀を例にお話ししたいと思います。葬儀にお邪魔させて頂きますと、三河の方では葬場勤行の後に、灰葬勤行を必ずすることになっています。名古屋の葬儀では、僧侶が火葬場に行く場合はしないことがほとんどです。しかし、三河の方では火葬場に行けない人もいるから、行けない人の為に、火葬場に僧侶が行こうが行こまいが灰葬勤行をするのが一般的であります。そういうことですので、葬場勤

行から灰葬勤行の間で花を変え、蠟燭を変え、という時に弔電披露をするんです。私は、その弔電披露の時の弔電の言葉が非常に気になる訳ですね。というか苦になるんです。「なんで苦になるのか」と言いますと、その理由がわかりやすいようにNTTのお悔やみ電報の文例を電話帳からコピーさせていただきました。紹介させていただきますと、こんな言葉が一般的になっています。

一番目は、「ご生前のご厚情に深く感謝するとともに、個人のご功績を偲び、つつしんで哀悼の意を表します。」これは、まだ真宗の教えからなんとか使えるのかなと思います。しかし、あとの文例はすべて「～ご冥福をお祈りいたします」とどれもこれも書いてあるんです。「冥福を祈る」とありますが、真宗では祈りのない宗教なので、祈らないんです。祈らないのに関わらず、真宗の葬儀をやっているところに「～のご冥福をお祈りいたします」との電報を打ってしまう。これが気になってしょうがないんですね。苦になってしょうがないんですね。それでは真宗ではどのような言葉を使うのか、と考えますと、「天国」→『お浄土』、「安らかにお眠りください」「安らかな旅路を祈ります」→亡くなった方は死んだら終いではありません。亡くなくてもなおかつ仏さまとなって私たちの事を願い続けて下さる。だから眠る訳ではないのですね。では何と言うのか。『お浄土よりお見守りください』『お浄土で存分におはたらきください』が適切なのではないのでしょうか。次に「〇〇さんのご霊前、御霊」→魂などのことはいいませんので『阿弥陀如来の尊前』というのが正しいのかなと思います。他には「昇天された」→これは『往生された』。使わない言葉として「冥福を祈る」「永眠」「草葉の陰で」。私たちは死んだらどこへ行きますか。お浄土でございます。草葉の陰なんかそんな寒くて湿っぽい所に行きたくありません。そんなところに行ったら、どうして居心地が悪いもんですから「うらめしやあ～」となってしまうのです。こんなところにはいかない、お浄土に行くのですから。ですから草葉の陰という言葉は使いません。真宗の弔電文例をあげますと

- ・〇〇様のご逝去の報に接し、衷心よりお悔やみ申し上げます
- ・〇〇様の衷心哀悼の極みに存じます。ご遺族さまのご愁嘆いかばかりかとお拝察申し上げます。今生のご活躍を偲びつつ念仏申し上げます。
- ・ご逝去の報に驚いています。さぞかしお力をおとしてございましょう。申し上げる言葉もございません。今はただお念仏申し上げるばかりであります。
- ・〇〇様のご逝去なされたと聞き、深い悲しみに沈んでおります。在りし日のお姿を思い、お念仏申し上げます。

是非参考にして頂きたいと思います。真宗の方が電報を打たれる場合、あるいは真宗の方に電報を打つ場合、こういったものを参考にして「ご冥福を祈る」といったような言葉を是非使わないようにして頂きたいと思います。なぜ使わない方がいいか。祈るということは、どうしても‘神仏にお願いする’ということになります。「祈ると言わない代わりにどういったらいいのか」といいますと、これは‘念ずる’という言葉であると思います。念ずるは心に強く思うということでもあります。祈るという言葉にも心に強く思うという意味もありますが、神仏に祈るという意味合いが強いので、浄土真宗に生きる者にとってその信心の在り方をはっきりさせるためにもやはり使わない方がいいと思います。

それでは、「浄土真宗は祈るということをやぜしないのか、なぜ祈らないのか？」ということでもあります。私たちの祈りは自己中心の心から起こるものですから。言い換えると欲望から起こる祈りは欲望から起こるのです。願いといえば聞こえはいいですが、願いが叶えば感謝の気持ちもですが、叶わなかったら不平不満がでる私たちではないのでしょうか。そして、私の願いが全て叶ったならば、私以外の人達は

とても嫌な世界になってしまうのではないのでしょうか。独裁政治などはそうですね。自分の欲望をどんどん叶えていく。周りの者にとってはどんどん嫌な世界になっていく。どうしてかと言いますと、その欲望というものは自己中心の心から起こるからです。浄土真宗の本尊、阿弥陀様をお願いしても叶えてくれません。願いを叶えてくれる阿弥陀様ではありません。一生懸命祈っても無駄であります。では、私たちが参るとは一体どういうことであるか。私たちが参るということは、‘仏さまの願いを聞く’ということであります。仏さまの願い（ご本願）とは、自分勝手な願いを叶えて下さいと一生懸命になっている私に向かって、そんな自己中心的な願い（欲望）が叶うようにとお願いするのではなく、自己中心的な願いしか持てない自分を厳しく見つめ直し正しく生きてくれよと願ってくださるのです。

私の親戚が豊明で眼医者をやっている。親戚と言っても父の従兄の関係で、血筋としてはすこし遠いのですが、非常に仲良くさせてもらっているのです。振り返りますと私が20歳の頃、今は引退した大先生、現院長の若先生である長男さん、そして大先生の奥様と、若先生の弟の次男さんと家族4人と私で5人でマラソンをやったことがあるんです。岡崎の駅から20数キロを一緒に走りました。どういうわけか、奥様と小学生の次男さんがまずスタートする、そこから10分おいて私がスタート、さらに10分おいて大先生と中学生だった長男さんがスタートしたんです。実は、ハンデを与えられてしまったのです。面白くなかったですね。中学生より自分の方が遅いと判断されたのですから。納得いかなかったのですが、いざスタートしますと7キロ地点で私は前に行く奥さんと弟さんを抜いたんです。「そら見たことか」と思っておりました。そして、10キロ地点で後ろから足音が聞こえると思えば、大先生と長男さんがトントントントと走ってきて、あっという間に私に追いついたと思ったら私を置いてきました。ゴールインの時は、30分以上も差がついて完敗だったんです。そんなことがあったものですから、今でも非常に仲良くさせてもらっているのです。先日、弓道をやっている娘が学校の視力検査で右目が見えにくいということで、コンタクトを作りたいとなったのです。そういうわけで久しぶりに豊明の病院を訪れたんですね。長男さんの若先生に診察してもらってから、昔話に花が咲いてきました。そこに大先生夫婦もわざわざ住まいから病院まで来てくださった。お話をしていると、大先生はもう72~3歳になると思うのですが、その話の中でお聞きしたんです。「今でも走っているんですか？」と。その先生、前述ほど走られる方ですから、毎日毎日走るんです。豊明にその病院を建てられたのは、近くに土のグラウンドがあるからなんなんですね。その土のグラウンドで毎朝走りたいからという理由で病院をそこに建てられたんです。走ることを20代の中盤くらいから毎日のように続けている。私とマラソンを一緒にした時も、20数キロ一緒に走った後に、私はもうすでにダウンして母親に迎えに来てもらって自宅まで帰ったのですが、その大先生と若先生は、そこからさらに私の家まで10数キロまた走ってきました。これで、もうすでに40キロ近く走っていることになります。これくらい走る方ですから、今でも走って居るのかなとお聞きしたんです。すると大先生は「さすがに距離が少なくなって、毎日7キロくらいは必ず走っていますが昔ほど走れなくなりました。月まで走ろうと思っていただけでも、月まで走るのとは断念しました。」と言われたんです。一瞬なんのことか分かりませんでした。「月まで走る」。そうか、月までの距離を走ってみようと考えてみえたのだろうかということがわかりました。

月までの距離は、384400キロ。1日仮に20キロ走ったことにすると、1年では20キロ×365日＝7300キロとなります。月までの距離384400キロ÷7300キロ＝52.2・・・となるので、だいたい毎日20キロくらい走ると、52~53年くらいで月に到達するわけです。ですから25歳くらいからスタートして、20キ

ロ以上走る日もあったとしても 78 歳くらいまではかかるわけですね。そして今ペースが落ちてきたので断念したということなんです。そこで大先生が言われた言葉が、「月まで行こうと思っていたけれども、月まで行くことはあきらめました。人間ていかに無力なものだということがわかりました。」と言われたんです。この大先生の病院は、今では大きな大きな病院になっております。長男さんも眼医者で跡を継がれ、次男さんも他市で眼医者、長女さんも他県で医者をやっております。言ってみれば、これは大成功ですよ。その成功された大先生ですら仰られる言葉が「人間ていかに無力で、そしてちっぽけなものだわかりました」と言われるのです。しかし、写真で見る月なんかすぐそこに見えるではないでしょうか。すぐそこに見える月にすら私たちは走っていくことも出来ないのです。そんな無力な私たちであることを気付いているようで気付いていない私たちなのではないでしょうか。科学の力で何でもできるような気ですが、月に走っていくことすらできないのが実状です。そういった自己中心的な願いしかもてない私たちであるということに気付かせて頂くことによって、その自分を厳しく見つめ直して生きてくれよ、と阿弥陀様はご本願＝願って下さっているのです。

そのご本願のはたらきによって、「私たちが本当の幸せになっていくんだ」と伝え下さっている和讃が、私が初めに読ませて頂いた讃礼の和讃「本願力にあいぬれば むなくすぐるひとぞなき 功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし」であります。天親菩薩の和讃 10 首の中の 3 番目。特に我々は勤行の中では葬儀の時などに使わせて頂くことがあります。現代語訳をさせていただきますと、「本願のはたらきにお遇いすれば、空しい時に過ごしことも人もなく、宝の海のような功德が身に満ちて、濁った水のような煩惱も（仏への）妨げになることがない。」と訳されるわけです。語釈をしますと、‘本願力’とは、阿弥陀如来の本願にかなって完成された救いのはたらきであり、南無阿弥陀仏のはたらきのことを指します。‘功德の宝海’とは、私たちにとっては宝である功德が、名号にすべて納まっていることを海に喩えたお言葉であります。‘煩惱の濁水’とは、煩惱を濁った水に喩えたお言葉であります。まとめますと、このように解釈します。自己中心的な考えしかもてない私たちであることを見抜いて下さり、その身そのままでもいい、その私たちを必ず救うぞとの誓い、願いが本願（根本の願い、本当の願い）であり、その願いのはたらきが名号となって、南無阿弥陀仏となって、私たちの生活の拠り所となっているのです。ですからそのはたらきのことを本願力というのです。量りしれないはたらきに生かされて生きている、そのことにすら気付いていない、そのことに気付かせて頂くはたらきがご本願というのです。そのご本願に遇ったならば、「空しくすぐる人はいない」と言われています。「宝の海に濁った煩惱の水が混ざったとしても、大きな大海においてはまざった煩惱の水ですら功德の宝海とひとつになって、本当に尊い宝のような功德が身に満ち満ちてくる」と言われる和讃なのです。この和讃は、実は『浄土論』『願生偈』この中のお言葉から親鸞聖人が作ってくださったものであります。その浄土論の最初にこのような言葉が御座います。

世尊我一心	・ ・	世尊われ一心に
帰命尽十方	・ ・	尽十方無碍光如来に
無碍光如来	・ ・	帰命したてまつる
願生安楽国	・ ・	安楽国に生ぜん願ず

これが一番初めで、朝のお勤めの時の回向文として使われることが多いですね。中略しまして、その次に出てくる言葉は

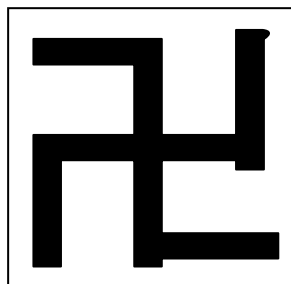
観仏本願力	・ ・	仏の本願力を観ずるに
遇無空過者	・ ・	遇いて空しく過ぐるものなし
能令速満足	・ ・	能く速やかに功德の
功德大宝海	・ ・	大宝海を満足せしむ

まさにこの言葉が「本願力にあいぬれば むなしくすぐるひとぞなき 功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし」の親鸞聖人の和讃につながっていくのであります。そして、

我作論説偈	・ ・	われ論を作り、偈を説きて願ず
願見弥陀仏	・ ・	弥陀仏をみたてまつらんと。
普共諸衆生	・ ・	あまねく諸々の衆生とともに、
往生安楽国	・ ・	安楽国に往生せん。

これらを見ますと、「観」、「見」、「生」ということが顕わされています。阿弥陀仏の浄土を觀じ、阿弥陀仏を見たてまつり、阿弥陀仏の浄土に生まれんということです。そういった天親菩薩の表白といえるのがこの「願生偈」なのだと思います。表白とは、こころの訴えでありますから「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」と示されるのです。『浄土論』を制作した天親菩薩の「親」、『浄土論註』を制作した曇鸞大師の「鸞」。これをとって自ら親鸞と名乗られたのです。親鸞聖人は幼名＝松若丸、もしくは松若磨、それから得度をして範宴となります。法然門下では3つの名前を名乗ります。法然上人に頂いたのは綽空・流罪の時は善信、そして自ら親鸞と名乗ったのです。これは非常に天親菩薩のことを心から敬っておられる証拠なのであります。その天親菩薩のお言葉に「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」とあって、その言葉が「本願力にあいぬれば むなしくすぐるひとぞなき 功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし」という和讃を作られたきっかけになっていったのです。そしてこの和讃によって、「私たちの宗教というものは自分勝手な都合を祈ることではなく、仏さまの願いに遇うということが最も大切なことなんだ」と言われるのです。私自身の勝手な願いをお願いするのではなく、仏さまの願いに遇うことが大切なのです。だから、仏さまの願いに遇うことによって空しく過ぐることもなく、「功德の宝海に満ち満ちて煩惱の濁水へだてなし」とあるように、煩惱にまみれた私が本当の幸せに出遇わせて頂ける尊い和讃ではないかと思えます。

～休憩～



あるテレビのクイズ番組を見ておりました。このマークはなんでしょう。アメリカの先住民であるインディアンがグランドキャニオンの岩場に残したマークだそうです。答えは、旅を表す。移動することを表すそうです。「卍」の下の部分が切れているものもあるそうです。どういう事かと申しますと「谷に下りた」と

いうことを、「インディアンたちの生誕の地、グランドキャニオンにちゃんと行ってきたよ」という意味の印らしいです。妻と一緒に見ていまして、「あのマーク

と似ているね」と妻が言うのです。そうです、「卍」はお寺のマークですね。続けて「そういえばあのお寺のマーク、地図を見るといつでも出てくるけど、どういう意味があるの?」と聞いてきたのです。聞

かれても正直分からなかったんですね。ですから、すぐに調べてみました。これはお寺のマークでありますから、「仏教大辞典」を調べたんです。そうすると、このように書いてありました。梵語でスヴァステイカ、吉祥徳相と訳します。「卍」とは吉祥万徳の集まる場所という意味です。吉祥とはいうのは、めでたい。めでたくて数多くの徳が集まる場所というのが「卍」というマークの意味であって、お寺というのは吉祥万徳の集まる場所という事になります。深浦という先生がいうには、「華嚴經の四分律に出ており、太陽の光が四方に出ている相で、光が働いているから物にあたり、屈折してLの手になっている吉祥相」と説明して下さっています。これを読ませて頂いている時に、『4L クラブ』というのを思い出しました。聞いたことありますか？本願寺のロサンゼルス別院の聞法会で、特に熱心な聴聞者の集まりを『4L クラブ』と名付けたのです。何かと言いますと、4L とは「卍」の真ん中にはさみを入れると4つのLができる。この4つのLをLIFE (命)、LIGHT (光)、LOVE (愛)、LIBERTY (自由)と頭文字がLになって意味が当てられるんですね。私たちは無量光＝はかりしれない光に照らされて、無量寿＝はかりしれないいのちを歩ませて頂いて、仏の慈悲の心に遇わせて頂いて、本当の意味での自由というものを仏教によって知らされた、といった意味で「卍」を見られて『4L クラブ』と考えられたようです。ひかり、いのち、慈悲、自由、まさにご本願そのものではないでしょうか。素晴らしいネーミングだと思うんです。根本はご本願であり、このご本願を表すような4つのL＝「卍」がお寺のマークとして使われていることは非常に尊い事なのではないでしょうか。大事なことを考えさせて頂く尊い御縁を頂いたなと妻に対して感謝しておるわけですが、言葉には表しておりません(笑)。本当にいい勉強ができたなと思っております。根本は本願でありまして、その願いに遇うということが非常に大切なのですが、なかなか願われていることにも気付かない私たちなのであります。

そこで、素直に「ありがとう」といえない相手第一位。これは‘おやじ’という存在だそうです。誰が調べたかはわかりませんが、ある本に書いてありました。わからなくてもいいですね。私も非常に父に感謝しておりまして、一生懸命寺を守ってくれたし、必死になって仏法を伝える寺におって、必死になって勉強しておる姿をみております。だから非常に尊敬しておりますし、寺を守る、寺をなんとか伝えていくことをやっている父にむかって「ありがとう」と言いたいですが、面と向かってなかなか言えません。多分、この久遠寺さんのご住職も信雄さんもなかなか面と向かって父親に「ありがとう」と言ったかどうかはわかりませんね。なかなか素直に言いにくい相手が‘おやじ’という存在なのではないでしょうか。その‘おやじ’という言葉は漢字で表すと「親父」、自分たちよりも年を食っているということで「親爺」、敬いのこころを込めた‘仁’を入れて「親仁」となるそうです。こういった字がだんだん自然に重なって‘おやじ’という言葉になっていったと教えられています。

その‘おやじ’のことで、あるご門徒さんを通して大切な御縁を頂きました。私の妻の在り所は渥美半島の真ん中あたりにあります真宗大谷派のお寺で、漁港がある小さな集落の真ん中にあります。その漁港の集落全部が門徒さんであって、半分が漁業、半分が農業でありました。いまでこそ会社勤めをされる若い方もでてきたのですが、私が結婚させて頂きました20数年前は100%近い方が漁業か農業でありました。唯一1件が妻のお父さんが学校の先生をやっておられたくらいのことでありました。それ以外は自営業だったんですね。ですから、時間の都合がつくもんですから、非常によくお寺に聞法されるんです。小さい頃のうちから熱心に教化活動をしておられたんですね。今でも夏休みはラジオ体操の前にお

寺の本堂で朝 6 時から「正真偈」の練習会をしておられる。小さい子からご老人まで、たくさん人が集まってくるんです。そんな場所で育ってこられているので、大人になってからも非常にお寺に参って下さるんです。ですからお寺に一生涯通って聴聞するというお気持ちの方も多いのです。そんな中で何度か伺っている内に、お寺の役員をやっておられた 60 代の男性がいきなり一杯やりながら聞いてこられたんです。「浄泉寺さん、あんたどうして坊さんになったんだ？」と。そう言われながら、私は心の中で思いました。生まれたときには気付いたらお寺に生まれておって、気付いたら衣を着せられておって、気付いたら坊さんになっておった。もちろん仏法に遇わせて頂く中で、僧侶の仕事は非常に尊い仕事であって、大切な仏説を伝える場所に住まわせてもらって、その仏説を伝えるお手伝いをさせて頂く。こんな尊い仕事は他にはないんだと思えるようになってきたわけです。しかし、なぜ坊さんになったかと言われると前述通りになってしまうんです。ですから、答えようがないんです。そこで、答えに困った時は、ディベートの作戦として「オウム返し」というのがあるのですが、聞かれたことをそのまま返す作戦を決心しようと思い、そのままその作戦を使わせてもらいました。「いやいや、わたしのこともアレですが〇〇さんはどうして漁師になられたのですか？」と聞きますと「そうじゃない、あんたのことを聞いておるんだ」と言われるかと思いきや「聞いてくれるか」と言われるのです。それで私は「是非聞かせて下さい」と言い、〇〇さんは「少し長くなるけどいいか」と言いますので、私も「いやいや、構いません」と言ったら、私に教えて下さいました。

その方は、実は高校三年生の夏休みまで跡を継いで漁師になろうか、外の世界に出て違う仕事をしようか、迷っていたそうです。何で悩んでいたかと言いますと、漁師をしている父親の姿を見ていると、とても漁師をやっておって幸せそうに見えなかったそうです。なんで幸せそうに見えなかったか。夜中のうちに家を出て漁に行く、帰ってくるのは昼頃になる。夜は 8 時に寝てしまう。夜 8 時に寝るにしても晩御飯の時に家族の交流があればいいけれども、一切交流もなければテレビも見ずにそのまま寝てしまう。そんな毎日を繰り返し繰り返し続けていたそうです。学校の事はすべて母親任せで、父親は入学式も卒業式も運動会にも学芸会にも一切来てくれない。そんな姿を見ていると何が楽しみで生きているのか、本当にこの父親、自分が幸せだと思って生きているのだろうか。そういう疑問を持つようになってきた。だからそんな父親と同じ生活をして、自分が幸せになれるのだろうかと思うと漁師になることを疑問に思ったそうです。父親の本心がわからないものですから、賭けにでたそうです。父親が少しでも今の生活に幸せだと感じ、家族のことに對して思いを寄せてくれていれば自分は漁師になろう、父親が自分たちのことに思いも寄せてなければ、今の生活も幸せに思っていないのならば、漁師を辞めて他の世界に行こうと賭けに出たのは、最後の剣道の大会。夏休みでありました。小学校からやっていた剣道、なんとか県大会までくることができましたが、相手は強豪でありますからとても勝てそうにない。ひょっとしたら最後の大会になるかもしれない。その試合を父親に是非会場に見に来てくれるように頼んだんです。「お父さん、今度の剣道の県大会は自分の胴着姿は最後かもしれない。だから忙しいことは分かっているけれども、最後のお願いです。高校時代の最後の剣道の姿をどうしても見に来て下さい！」とお願ひしたのです。来てくれたならば漁師をやる、来てくれなければ漁師を辞めて他の世界に行こうとこう考えたのです。そして、当日。会場の中で父親の姿を探す。いくら探しても最後の最後まで父親の姿は見れなかった。試合も残念ながら健闘はしたのですが負けてしまい、最後の剣道となってしまった。家に帰って、父親の姿を探す。いない。いるところはだいたい想像がついた。海辺に行く。海辺に行くと、案の定漁を終えて、父親が網の修繕をしていたそうです。その父親に向かって「お父さん、どうし

てきてくれなかったんだ。俺の最後の試合だったんだぞ！」背中越しで修繕をしながら父親はその言葉を聞いている。その態度に腹が立ってどんどんどんどん口が悪くなっていく。「おやじっ！答えてくれ！！」それでもどうしても答えてくれない。「おやじはそれで幸せなのかっ！！！」と言いますと、お父さんは立ち上がって自分の方に振り向いて低い声でこう言いました「おれが幸せかどうか？ならば答えてやる。幸せに決まっているじゃないか」「どうしてそんなことが言えるんだ！俺にはおやじがとても幸せになんかに見えない。なんで幸せなんて言えるんだっ！！」「なんで幸せかって？俺が幸せなのは、お前がいてくれるから。お前たち家族がいてくれるから幸せなんだっ！！幸せに決まっているじゃないかっ！！！」と言ってまた振り返って座り、網の修繕を始めたそうです。その言葉を聞いて、その方は頭の中で心が打ち砕かれたような気がしたそうです。父親の本心を初めて知った瞬間でありました。漁師という仕事はなかなか大変な仕事でありまして、帰ってきて網の修繕をするにしたって人手がなくてはできません。一人でやるのはとても大変なことです。ですから息子さんに継いでもらいたいという気持ちは当然持っているのです。ですが、そのことを口にせず自分が一生懸命働くのは家族の為、息子の為であったのですね。そのように想ってくれる親の心・親の願いがわかった瞬間に、「よかった」と思うのと同時に、「父親の手助けをしたい」と思い、父親と同じ道を歩んで漁師になろうと決心したそうです。現在はそのお父さんは亡くなってしまったのですが、その息子さんも漁師となって、おいしい魚を採ってきてくれるんですね。続けて言われまして「自分の父親はどこにも遊びには行かなかったけれども、お寺にはよくご聴聞に行ったようです。父親のようにはなれないかもしれませんが、少しでも父親に近づけるように、自分もお寺に聴聞に通わせてもらおうと、これだけは一生懸命やろうと思っています」とお聞かせ下さいました。私は思わずその方に手を合わせました。「有難いことを教えて頂きまして申し訳ありません。素晴らしい話でありましたから、余所で話してもよろしいですか？」とお尋ねしましたら「近くでは話さないでくれ。俺だってばれるかもしれないから。遠くなら構わないぞ」ということで、名古屋は遠くでありますので紹介させてもらいました。

気付かされる、浄土真宗では私の願いを叶えてもらうのではなく、仏さまの願いに遇う、願いを聞くんです。それによって自己中心の心から離れられない私に気付かされるのと同時に、私が本当の人間としている道が見えてくるのだと思います。

ある布教使の先生が教えてくれました。「南無阿弥陀仏は『南無』と『阿弥陀』と『仏』に分けて、『南無』は我に任せよ、『阿弥陀』は必ず救う、『仏』は親じゃもん、ということだよ。」と教え下さいました。私たちはご本願によって必ず救うぞと誓って頂いています。必ず救うというはたらき＝本願力にすべて任せる＝我に任せよ、と阿弥陀様の方から言って下さっているのです。そして仏は親であります。本当に私たちの心の拠り所なのであります。この拠り所が、必ず救うと言われる南無阿弥陀仏のはたらき＝本願力といえるはたらきなのではないかと思えます。

これからも、このご本願ということは何度も何度も言っていきたいと思えます。

平成 22 年 5 月 20 日